

# →その問題、 解決します！

NPOと協力し  
多胎妊婦を支えます！



(左から) 岐阜県子ども・女性局子育て支援課主事の菱田朋寛さん、主査の武山智史さん、課長の古田幹雄さん、技師の大久保成美さん、主幹兼係長の奥村佳子さん

## 岐阜県多胎プレパパママ教室

# ハイリスク妊婦を地域で支える

双子や三つ子の出産・育児は、パパやママにとって負担が大きいうえ、外出もしにくいので孤立化するケースもあります。岐阜県では、これから双子や三つ子の出産を控える人を対象に「多胎プレパパママ教室」を開催し、仲間づくりや保健師を中心とした地域ぐるみでの支援につなげていきます。



### 地域のNPO法人の協力で 支援事業を開始

岐阜県が多胎プレパパママ教室を始めたのは、2015年のこと。岐阜県子ども・女性局子育て支援課主事の菱田朋寛さんは、「行政と医療機関、NPO法人ぎふ多胎ネットがチームとなって、母子保健の入り口である妊娠期を重点的に支援したいと考えました」と説明します。

NPO法人ぎふ多胎ネットは、多胎家庭の支援を行っている団体です。もともと岐阜県には、双子や三つ子の家族の交流サークルが10以上ありました。各サークルのリーダーが集まる交流会で、双子や三つ子を育てるうえでの工夫や大変さを後輩ママやその配偶者に伝えていきたいと

いう声があがったことを受け、同法人が多胎家庭支援の役割を担うこととなったのです。

2011年に、同法人は「岐阜県公共の場作りのモデル事業」を利用し、「ふたごちゃんみつごちゃん育児応援事業」を実施。同事業では、双子や三つ子を出産予定の妊婦とその配偶者を対象とした「プレパパママ教室」と、出産後に健診を受ける際に手助けをする「多胎児健診サポート」を行いました。

2013年も、県の「ふるさとぎふ再生事業基金」を利用して、「妊娠期からのふたごちゃんみつごちゃん育児応援事業」として、「多胎プレパパママ教室」と「多胎育児教室」を開催しました。これらの事業を踏まえ、菱田さんは「行政で多胎家庭に向けた

教室を開催したいと考えましたが、必ずしも市内に双子や三つ子の育児の経験者がいるわけはありません。やはり経験者から話を聞いたほうが、多胎妊婦やその配偶者にとっても良いだろうと思いい、県としてはNPO法人ぎふ多胎ネットに委託して、多胎プレパパママ教室を行うことにしたのです」と話します。

### 双子や三つ子の育児経験を 後輩ママやパパに伝える

多胎プレパパママ教室は県内5カ所です。それぞれ年2回開催しています。開催時間は午後1時半から3時半まで、その後個別相談に対応。毎回、平均して10組前後のパパとママが参加しています。

参加者は妊娠が判明したばかり

## 児童虐待の防止

児童虐待を防ぐため、国は児童福祉司を増やすなど、児童相談所の体制強化を図っています。児童相談所と学校、警察がこれまで以上に協力して子どもを守れるようなルールづくりも進めています。

もし、子どもにつらくあたってしまったり、「虐待かもしれない」という場面に遭遇したら、児童相談所全国共通ダイヤル189番にご連絡ください。

誠子さんは、「双子の場合、退院時でも平均2500gしかなく、ミルクを飲ませようとしても飲みがあまりよくありません。教室では二人合わせて1日20回ミルクをあげ、そのつどゲップをさせる、オムツ交換も1日20回あり、親は寝る時間が全然ないといった具体的な話をします」と説明します。

同法人代表の糸井川さんは、「双子の場合、退院後も平均2500gしかなく、ミルクを飲ませようとしても飲みがあまりよくありません。教室では二人合わせて1日20回ミルクをあげ、そのつどゲップをさせる、オムツ交換も1日20回あり、親は寝る時間が全然ないといった具体的な話をします」と説明します。

同教室では助産師が多胎妊娠・出産のリスクを、保健師がファミリーサポートセンターなどの地域にある子育て支援サービスを紹介。さらに、研修を受けた多胎育児経験者が自身の経験をもとにアドバイスをしたり、相談に乗ります。



多胎プレババママ教室では、配偶者は妊婦体験をしたり、経験者から話を聞いたりして理解を深める



図表 多胎プレババママ教室の効果

### 当事者

- ・不安の軽減
- ・相談窓口の獲得
- ・育児イメージの獲得
- ・仲間づくり

### 医療・行政

- ・妊娠中から要支援者の発見
- ↓
- ・早期の支援計画立案
- ・必要機関との連携体制確立

りの人から、出産間近の妊娠32週の人まで幅広く、なかには出産のために妻がすでに入院し、夫のみで参加するケースや、その両親が参加するケースもあるそうです。

同教室では助産師が多胎妊娠・出産のリスクを、保健師がファミリーサポートセンター

育児負担が大きいため、夫婦二人だけで育児をしようとしても、うまくいきません。祖父母や兄弟、近所の人や職場の同僚などの協力を得て、「チーム」で育児をしていくことが大切で、そのためにも出産前から「チーム」のメンバーになってくれる人を探してあげたいです。

参加者からは「初めて双子の育児の話を聞いてびっくりした」「聞いてよかった」といった声や、「両親が遠くに住んでいて頼れない。どうすればいいか」「上の子の面倒はどうやってみればいいのか」などの質問が寄せられているそうです。また、その両親からも「娘から育児を手伝ってほしい」と言われたら、いつでも行けるように覚悟した「仕事のシフトを変えて準備しておきたい」といった声があがっているとか。

同教室に通じて、保健師が地域にいる多胎妊婦を知ることができるというメリットもあります。双子や三つ子の出産は、母体にとってもハイリスクです。同教室で多胎妊婦と知り合い、家庭環境も知ること、保健師は出産前から支援計画を立ててサポートができます。

「教室に来たときは不安そうなお顔をしていたパパやママが、帰るときには『困ったと言えば助けしてくれる人がたくさんいることがわかった』と明るい顔に変わるのが見て、手応えを感じています」と、糸井川さんは話します。